



「現代社会の家族の関係を小説に書くことで、迷える若者に寄り添いたい」と語るのは、大井町の田中廣司さん。

田中さんはことし、県文芸祭の創作・児童文学部門で文芸大賞を受賞した。これは、文芸創作活動の充実を目的に、県と県教育文化財団が毎年開催している祭典だ。「自分の作った物が評価されることは単純にうれしい。創作活動の道を突き進んでいく決意が固まった」と受賞を喜んだ。

高校3年生の時、進路に迷い、ノーベル賞作家の川端康成氏に手紙を出した。直筆の返事に書かれた「やはり大学へ行った方がよろしいですよ」「文学はそんなにせっかちなものではない」「言葉に突き動かされ、名古屋大学へ進み、その後教師になることを決めた。この一枚の手紙が、人生の道しるべとなった。昭和48年からは社会科教師として教壇に立ち、平成19年には坂下高校の校長に就任。同校を退職後は、中京学院大学で特任教授を務めた。小説を書くことと思つた切っ掛け

学ぼう伝えよう  
輝く  
恵那人  
115



家族の在り方を小説に  
小説『杖の音』で県文芸大賞を受賞

□プロフィール

平成23年から小説を書き始め、これまでに三作を書き上げる。40年余りの教師経験を生かし、小説・児童文学の執筆に挑んでいる。

恵那で輝いている旬な人を紹介します

大井町長島西  
田中 廣司 さん 65歳



は、かつての教え子から子育てや家庭の悩みを相談されるようになったことだった。子どもたちに読ませたい童話などを薦めていたが、読んでほしい物を自分の言葉で書いてみたいと思うようになった。

親子の絆を描いた処女作『恵那山』は同祭の創作・小説部門で秀作賞、いじめを題材にした『ライオン日記』は日本動物児童文学賞で奨励賞を受賞。今作『杖の音』は、祖父と孫の関わりを通して家族の在り方を描いた。

ゼロから作り上げることは大変な作業だが、物語を考えると苦しみながら書いているときも、とても楽しいと話す。「子どもを救いたいという気持ちが自分を駆り立てる」と小説に込める熱い思いを語る。

次回作の執筆にも意欲的で、「今後はもっと広い世界に作品を出してみたい」と目を輝かせた。



▲作品掲載誌と川端康成氏直筆の手紙

集団通学での安全を確認

NEWS&  
4月8日  
TOPICS



山岡小学校で、本年度初めての集団下校の日に通学班会議が開催されました。上級生の班長は「上手に並べるか」「集合時間は守れるか」など、集団で通学するときの決まり事を確認。会議終了後には、2列に並ばせて、道路の安全を確認しながら下校しました。

新明智小学校で皆が団結

NEWS&  
4月7日  
TOPICS



吉田小学校と統合した明智小学校で、出発式が行われました。これは、児童会がみんなで明るく希望あふれる学校をつくっていこうと計画したものです。37人の6年生が一言ずつ大きな声で「出発の言葉」を発し、最後には、全員が「おお」と拳を振り上げて団結しました。

中野方ふるさとかるたが完成

NEWS&  
4月11日  
TOPICS



中野方町の地域の歴史や史跡などを子どもにも大人にも分かりやすい形で残すために作られた「中野方ふるさとかるた」が完成しました。44札の言葉や絵は、町内のほぼ全世帯から応募があった1,642点から厳選。制作実行委員会は、完成の喜びを市長に報告しました。

新入生を温かく迎えた対面式

NEWS&  
4月9日  
TOPICS



上矢作中学校で、新1年生と2、3年生の「ギャップを外す」対面式が行われました。式では、生徒会長らが、中学校生活の一日の流れや年間行事を大スクリーンを使って説明。部活動の紹介では「県大会を目指します」など、先輩としての力強い言葉も聞かれました。

健脚競ったハーフマラソン

NEWS&  
4月20日  
TOPICS



恵那スケート場で、第13回恵那峡ハーフマラソンが開催され、3,136人が参加しました。大会は、ハーフマラソンや3kmのロードレースとジョギングの3種類20部門で健脚が競われました。緊迫感漂うスタート時、選手らは号砲と同時に勢よく足を踏み出しました。

伝統の歌舞伎を五毛座で公演

NEWS&  
4月12日  
TOPICS



飯地町の五毛座で第27回五毛座芝居公演が開催され、約400人が来場して公演を楽しみました。公演では、4人の小学生の子ども地芝居や、小中学生と飯地歌舞伎保存会が競演した歌舞伎、地域の名士の歌舞伎などが披露されました。この公演は隔年で開催されています。